

日本国際文化学会

<http://www.jsics.org>

ニューズレター

2008年5月12日 発行

日本国際文化学会事務局

〒102-8160

東京都千代田区富士見2-17-1

法政大学国際文化学部

熊田泰章研究室

2008年7月12(土)、13日(日)の両日、第7回大会が神奈川県茅ヶ崎市の文教大学湘南キャンパスで開催されます。プログラムが決まりましたので、お知らせいたします。

日本国際文化学会第7回全国大会のお知らせ

- 開催日／2008年7月12(土)・13(日)
- 会場／文教大学国際学部 湘南キャンパス6号館
〒253-8550 神奈川県茅ヶ崎市行谷1100
- 主催／日本国際文化学会 <http://www.jsics.org>
事務局：〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1
法政大学国際文化学部熊田泰章研究室
- 共催／文教大学国際学部・文教大学湘南総合研究所
- ◆大会参加費 一般会員 2000円 学生会員 1000円
- ◆情報交換・懇親会費 一般会員 5000円 学生会員 2000円
- お問い合わせ

日本国際文化学会第7回全国大会実行委員会

文教大学湘南総合研究所 若林 一平

実行委員会事務局 担当：早川 Eメール：hayakawa@shonan.bunkyo.ac.jp

〒253-8550 神奈川県茅ヶ崎市行谷1100

TEL 0467-53-2111 FAX 0467-54-1302

*大会参加ご希望の会員は、同封のFAX申込書をご利用くださるか、学会ホームページより申込書をダウンロードしてFAXかEメールでお申込みください。送信先は、FAX・メールともく大会申し込み>は大会実行委員会事務局あてに、<ホテル>とくご家族ツアー>は日本旅行あてとしてください(FAX番号・メールアドレスは各書類をご覧ください。)

◆大会会場への交通ご案内

茅ヶ崎駅(JR東海道線、湘南新宿ライン)北口バス乗場1番「文教大学行き」約20分、または湘南台駅(小田急線、相鉄線、横浜市営地下鉄)西口バス乗場2番「文教大学行き」約20分

第7回全国大会大会プログラム

◆第1日 7月12日(土)

09:00～10:00 [常任理事・幹事会]

10:00～12:00

[自由論題 セッションA・B・C・D・E]

□セッションA

司会：松井 賢一(龍谷大学名誉教授)

1) 高見 早苗(山口県立大学大学院国際文化研究科大学院生)

「フェアトレードからみた消費者の社会的責任～コーヒーのサプライチェーンを事例として～」

2) 佐和 達児 (立命館大学サステナビリティ学
研究センター研究員)

「環境と芸術の関わりに関する一考察」

3) パルデシ・ブラシャント (神戸大学人文学
研究科講師)、ディニル・プシュパラル (東北
大学国際文化研究科准教授)

「インド土着の思想に見られる環境保護の意識と
持続可能な社会」

4) 山崎 眞次 (早稲田大学政治経済学術院教授)

「メキシコ先住民問題—その集団権について」

□セッション B

司会：木下 資一

(神戸大学大学院国際文化学
研究科教授)

1) 王 美平 (早稲田大学大学院アジア太平洋
研究科外国人研究員)

「近代日本におけるアジア主義についての再考」

2) 鄭 榮蘭

(早稲田大学大学院アジア太平洋研究科
大学院生)

「韓国の政権別に見る対日文化政策の変遷と日本
文化の開放」

3) 中村 香代子

(早稲田大学社会科学総合学術院
助手)

「東アジア地域における記念空間の一考察—帝国
日本の神社と戦後の変容—」

4) 山内 晴子 (玉川聖学院講師、早稲田大学
太平洋問題調査会研究所客員研究員)

「朝河貫一論：天皇制民主主義の学問的起源」

□セッション C

司会：松田 浩志

(プール学院大学国際文化学
部教授)

1) 戎 妙子

(関西大学大学院外国語教育学
研究科大学院生)

「外国人児童生徒の日本語指導への日本語教育
スタンダード導入の可能性と課題」

2) 松尾 隆司

(龍谷大学国際文化学研究科
研究生)

「日本における南米出身日系人労働者についての
研究—「定住化」言説と日系人労働者のデカセギ
意識との齟齬について—」

3) 山中 大輔

(龍谷大学国際文化学研究科
大学院生)

「日本における日系ブラジル人の移住形態—日本
語学習をめぐる意識を中心に」

4) 村田 鈴子 (龍谷大学非常勤講師)

「国際教育の現状と課題—異文化受容と共生—」

□セッション D

司会：湯浅 英男

(神戸大学大学院国際文化学
研究科教授)

1) 原田 寿江子

(東北大学大学院国際文化研究科
大学院生)

「装飾文化と女性—アイデンティティ形成と社会
参与の観点から—」

2) 鈴村 裕輔

(法政大学国際日本学研究所
学術研究員)

「『茶の本』における岡倉覚三の異文化理解」

3) 飯山 雅英 (仏国立オルセー美術館
日本代表)

「日仏地方自治体間の新しい国際文化交流」

4) 小林 ひろみ (文教大学国際学部
教授)

「世界共通の問題としての英語
ニュース」

□セッション E

司会：寺田 元一

(名古屋市立大学人文社会学部
教授)

1) 山川 貴美代 (龍谷大学アフラシア
平和研究センターリサーチ・アシ
スタント)

「シンガポールにおけるエスニシ
ティと境界設定」

2) 金 花芬

(プール学院大学大学院国際
文化研究科研究生)

「日本における「朝鮮族」の
位置取りに関する事例研究」

3) 白川 俊介

(九州大学大学院比較社会文
化学府大学院生)

「ネイションの文化の保護の
観点による移民管理論の擁護—
リベラル・ナショナリズム論と
移民—」

4) 椎野 信雄 (文教大学国際学
部教授)

「『日本語』へのエスノメソ
ドロジック的アプローチ：
パート3『文化』の概念分析」

12:00 ~ 13:30 [フォーラム]

<国際文化学系における新しい
授業の試み—FDの成果と学生
参加型授業>

◎司会 奥田 孝晴 (文教大学
国際学部教授)

◎報告

井上 由佳 (文教大学国際学
部講師)

桑名 志麻 (プール学院大学
国際協働センター専門員)

山脇千賀子 (文教大学国際学
部准教授)

松居 竜五 (龍谷大学国際文
化学部准教授)

13:30 ~ 15:30 [共通論題 1・2・3・4]

●共通論題1 「異化／聖化の
<文化免疫学>排除されたもの
の方から文化の主体を探る—」

◎司会 木原 誠 (佐賀大学文
化教育学部准教授)

◎発表者

木原 誠 (佐賀大学文化教育学
部准教授)

「駆け込み巡礼、いざ鎌倉へ—
無縁 (アジュール) が結ぶ縁／
内なるディアスポラ」

田村栄子 (元佐賀大学文化
教育学部教授)

「ヴァイマル民主主義下の若い
女性労働者—民主的憲法と社会
的排除のはざままで」

吉岡剛彦 (佐賀大学文化教育学
部准教授)

「バッシングされるのは誰か？—
日本社会における『弱者』表
象の批判的考察」

高橋良輔 (佐賀大学文化教育学
部講師)

「テロルの時代の疫学的地政学—
《予防》から《封じ込め》へ—」

●共通論題2 「高齢社会日本に
おける在日外国人の活躍—
フィリピン人介護労働者の
ケース」

◎司会 カルロス、マリアレイ
ナルス

(龍谷大学国際文化学部
准教授)

◎発表者

鈴木伸枝 (千葉大学文学部
文化人類学講座教授)

「外国人女性と再生産労働：在日フィリピン人の事例から」

カルロス、マリアレイナルース
(龍谷大学国際文化学部准教授)

「日本の介護労働市場における外国人労働者の参入：在日フィリピン人のケース」

中井 久子
(大阪人間科学大学社会福祉学科教授)

「在日フィリピン人介護士の介護現場における課題」

後藤久美子(羽衣国際大学人間生活学部准教授)

「外国人介護士受け入れ意向調査報告」

高畑 幸(広島国際学院大学現代社会学部講師)

「在日フィリピン人の介護人材育成：移民向け職業訓練の視点から」

●共通論題3 「中間系の諸問題－東南アジアにおけるマジョリティーのエスニシティ－」

◎発表者

合田 濤(司会兼務)
(神戸大学大学院国際文化学研究科教授)

「問題の所在と分析視角－中間系と三角柱モデル－」

伊藤 眞(首都大学東京都市教養学部教授)

「インドネシアにおける新華人の形成－マカッサルの事例から－」

石井眞夫(三重大学人文学部教授)

「東マレーシア、サラワク州の"中規模"民族集団－地方政治の中で－」

長坂 格
(新潟国際情報大学情報文化学部准教授)

「都市のフロンティアとしての公共集合住宅：マニラ首都圏の事例」

遠藤 央(京都文教大学人文学部教授)

「マレーシア映画(マレー語映画)産業史とマレー・エスニシティの形成」

●共通論題4 「世界遺産への視線」

◎司会 大澤 暁(法政大学国際文化学部教授)

◎発表者

中島成久(法政大学国際文化学部教授)

「企画趣旨説明－屋久島の事例を中心として」

安田忠典(関西大学准教授)

「南方熊楠と熊野古道－世界遺産100年前－」

斎藤文彦(龍谷大学国際文化学部教授)

「世界遺産という文化表象をめぐる権力関係－アフリカの事例より」

田仲康博(国際基督教大学教養学部アーツ・サイエンス学科准教授)

「世界遺産の政治学－首里城跡地登録をめぐる」

松居竜五(龍谷大学国際文化学部准教授)

「万国博覧会から世界遺産へ」

15:30～16:00 コーヒーブレイク

16:00～17:30 [特別講演]

＜＜大学新時代における大学の責任＞＞

◎講演者

立命館アジア太平洋大学 モンテ・カセム学長

○司会 文教大学国際学部長 椎野 信雄

18:00～20:00 [情報交換・懇親会]

◆第2日 7月13日(日)

9:30～10:00 [理事会]

10:00～12:00

[自由論題 セッション F・G・H・I]

[共通論題 5]

●自由論題

□セッション F

司会：植野 雄司

(プール学院大学国際文化学部准教授)

1) スヤント

(日本大学大学院国際関係研究科大学院生)

「インドネシアにおける民俗学研究の軌跡と現状－口承文芸研究を中心に－」

2) 阪口 有美子

(龍谷大学大学院国際文化学研究科研究生)

「楚地にみる死生観」

3) 福田 訓久(国際文化学園)

「ナヴァホ族の文化触変に関する国際文化学的考察」

□セッション G

司会：熊田 泰章(法政大学国際文化学部教授)

1) 稲木 徹(中央大学法学研究科大学院生)

「文化に関する国際法構想と国際文化学」

2) 富樫 耕介(東北大学大学院国際文化研究科大学院生)

「EUにおけるチェチェン難民－チェチェン難民の二極化と東欧のシェンゲン協定加盟の意味－」

3) 福田 康恵(田園調布学園大学非常勤講師)

「EUにおける文化的価値観の多様性と医療ツーリズム」

4) 渡辺 肇

(倉敷芸術科学大学国際教養学部教授)

「ドイツ民族主義復活の静かなる底流」

□セッション H

司会：川村 陶子(成蹊大学文学部准教授)

1) 吉川 太恵子

(法政大学国際文化研究科博士後期)

「親族関係(kinship)で繋がる少数民族モン族のアイデンティティー難民として受け入れられた欧米3カ国でのモン族社会を事例として」

2) 檜崎 寿子

(龍谷大学国際文化学研究科大学院生)

「変容するアメリカ浄土真宗－信徒構成を中心に－」

- 3) 劉 榮純 (プール学院大学非常勤講師)
「日本におけるマイノリティの結婚—その2—日
本人と結婚した外国人配偶者を対象に—」
4) 仲地 清 (名桜大学国際学群教授)
「アメリカ統治下での国益・国境を越える試み」

□セッション I

司会：横川 潤 (文教大学国際学部准教授)

- 1) 磯部 泰子
(NPO法人国際食文化研究所プロデューサー)
「イタリアのスローフード」
2) 横川 潤 (文教大学国際学部准教授)
「ボーダレス化する食文化と食批評」
3) 小林 哲
(大阪市立大学大学院経営学研究科准教授)
「ニューヨークの食文化事情—その概要と発展要
因—」
4) 石川 秀憲 (名古屋文理大学教授)
「フードサービス・食文化の発展のため、メディ
アはどう関わってきたか〜フードサービス専門メ
ディアの立場から〜」

●共通論題5「東アジア地域意識の展開と変容」

- ◎司会 長谷川 雄一
(東北福祉大学総合福祉学部教授)
◎発表者
福島政裕
(東海大学政治経済学部教授、日本公益学会)
「東アジアの地域主義」
福田耕治 (早稲田大学政治経済学術院教授)
「EUアイデンティティと文化から見た東アジア
共同体構想」
スヴェン・サーラ
(東京大学大学院総合文化研究科准教授)
「国際関係の変容と『アジア主義者』の『アジア』
認識—興亜会から大亜細亜協会まで—」
クリストファー・スピルマン
(九州産業大学国際文化学部教授)
「鹿子木員信とアジア主義の可能性」

12:15 ~ 12:45 [総会]

13:00 ~ 15:30 [公開シンポジウム]
<<文化の戦略性をめぐって>>

- ◎コーディネーター
若林 一平 (文教大学湘南総合研究所所長)
◎パネリスト
鎌仲 ひとみ
(映画監督・東京工科大学メディア学部准教授)
「新しいつながりが生み出す文化の行方」
田仲 康博 (国際基督教大学教養学部アーツ・
サイエンス学科准教授)
「沖縄ブームの源流：米軍統治下の文化政策」
鶴飼 正樹 (京都文教大学人間学部文化人類学
科准教学科准教授)
「客に接する商売としての芸能」
海津 ゆりえ
(文教大学国際学部国際観光学科准教授)
「文化の意思—戦略としての観光・メディアとし
ての旅人」
◎コメンテーター
寺田 元一
(名古屋市立大学人文社会学部国際文化学科教授)

学会誌『インターカルチュラル』最新号 第6号 (2008年) のお知らせ

特集国際化時代の「琉球(沖縄)文化」—その地域性と普遍性—

- 比屋根照夫 近代沖縄と伊波普猷
比嘉幹郎 戦後沖縄の文化に対する米国のインパクト
高良勉 沖縄における反復帰論と独立論の系譜
内間直仁 琉球方言を通してみた沖縄文化—沖縄文化を支える意識と構造—

研究論文(副題略) 比嘉理麻「現代沖縄における豚肉の「部分消費」の拡大と制御」、小西正男「ノ
スタルジー再論」、森田系太郎「「環境的自省性」という提案」、長坂格「都市移住者によるエスニック
・ビジネス・ニッチの形成」、実践レポート奥田孝晴他「「アジア共通現代史教科書編纂研究会」3
年の歩み」、研究ノート古家聡「個人主義と集団主義に関する批判的考察」、他に研究動向(執筆者)
木原誠、書評(執筆者)平野健一郎、小川忠、馬淵仁、村上明子、また鳥飼玖美子「国際文化学私の
三冊」等を掲載。

学会員には、事務局よりお送りいたします。未入会の方は、是非この機会にご入会ください。

*学会員以外で購入希望の方、またバックナンバー(第1号~第5号)購入希望の方は、書店に注
文するか、または下記に直接お申し込みください。(定価：各号とも2100円(税込))

アカデミア出版会 代表 渡部弘行 〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町1-6
TEL(075) 771-7055 FAX(075) 771-9595 郵便振替口座 01050-9-53749

日本国際文化学第13回研究会報告

表題：B面の国際文化学—虚構／周縁／ミクロ的思考

於：佐賀大学
佐賀大学 木原誠

日本国際文化学第13回研究会が2007年7月7日に佐賀大学で開催された。研究会は、第一部（午前10:00時～12:30）がシンポジウム、第二部（午後14:00～17:00）が叢書合評会という形式で行なわれた。以下、その議論の概要を報告内容を中心に、第1部、第2部に分けて記載する（質疑応答は多岐に及んだため、要点を絞り、内容を整理したうえで、発表内容に含める）。

第1部のシンポジウム 表題「B面の国際文化学—虚構／周縁／ミクロ的思考」は、司会、佐賀大学・相澤照明のもとで、報告1：佐賀大学・木原誠 表題：「国際文化学の主体はどこにあるのか？—（燃えあがる緑の木）B面のイメージを聴く男たち、イエイツ／大江—」、報告2：龍谷大学・松居竜五 表題：「近代科学を超えるために—南方熊楠の思想的挑戦—」、報告3：九州大学（現・岩手大学）・土屋明広 表題：「『国際化』の足場を問う—戦後日本社会における在日朝鮮人学校の位置価—」の順で発表が行なわれた。

まず司会の相澤が、一見すると、全く異なるテーマによる発表であるが、イエイツと熊楠は3歳違いで全く同時期の時代を生き抜き、共に故郷を離れながら故郷に回帰した点、また、今日の在日朝鮮人学校の問題も、1910年抜きには考えられない問題であり、そこには共通して20世紀初頭の民族問題と自己のアイデンティティの問題が潜在していることに共通論点が見られることを確認したあと、各報告者による発表が各々20分程度行なわれ、続いて質疑応答が行なわれた。

報告1に先立って、担当の木原が今回のシンポジウムの表題の発案者がであったことから、まずシンポジウム全体の趣旨説明を行なった。その概要は以下の通り。レコード盤にはA面とB面があるように、国際文化学にも表と裏があり、二つは本来表裏一体の関係にあるはずだ。この場合「表」に相当する部分を、現実（実証）としての歴史・政治学（ポリティクス）／中心（中央集権的思考）／マクロ的思考とみれば、その「裏」には背理としての「虚構としての詩学（ポエティクス）／周縁／ミクロ的思考」が潜んでいるとみることができる。本シンポジウムは、「文化」の主体のありかは、表としての華やかなくA面ではなく、むしろ裏／影としてのB面に宿ると措定したうえで、表の視点から説かれる「世界」の反提言として、裏の視点から「世界」「国際」の意味を問い直す、というものであった。続く報告1では、文学的側面、すなわちA面＝＜現実のポリティクス＞に対するB面＝＜虚構のポエティクス＞の視点から、大江健三郎のイエイツ受容の問題が論じられた。そこでの要点は、「世界文学」を目論む「国際人」としてのイエイツと大江が共に、自己の文学の立脚的な周縁／ミクロ（「私」の認識）に求めたというパラドックスであり、具体的には、大江がイエイツの中に見出し、

受容したものの核心は、「国際詩人」がもつ優れた周縁／ミクロ的思考であった点。このことを具体的に解明するにあたっては、大江のノーベル賞受賞講演、「あいまいな日本の私」と『燃えあがる緑の木』に着目し、そこにみられる逆説性について論じた。その概要は1：川端の「美しい日本の私」をパロディ化したうえで、国際的舞台であえて「私・日本」を語った大江の反客観的志向 2：ヨーロッパの極西／周縁の地、アイルランド詩人イエイツ賞賛にみられる反中央集権的思考 3：大江がイエイツから受容したものの核心、「ハレ」に対する「ケ」ともいうべき、存在することの深い悲しみ・痛みを逆説的に祀り上げる「仮面」の詩法が、実はイエイツが「能」から受容したものの逆輸入であり、ここに東西の相互補完的な文化交流の一端が伺われる点。

報告2は、報告1との繋がりから、まずは大江の『あいまいな日本の私』からの一節—「南方熊楠は、英語による論文と手紙によって西欧へ回路を開いた」—を引用し、彼の同時代人、漱石との東西に向かう回路の根本的差異について言及し（彼にはNatureに掲載された多くの英文での論文がある）。次に、「東国の学風」を創出する方法にみられる南方と柳田との相違点、すなわち、熊楠には「異なる思想、意見を、異なるものとして認識し、どこまでも正面から対決させ、対決させることをとおして、自己を明らかにしてゆくことを、意識的に自己に課し、東洋の思想を自己変革的に認識し直す思考様式（鶴見和子）」＝対決をおそれない複眼的な文明観があるが、このような思考様式を彼が身につけることができたのは、アメリカ及びイギリスにおける生活体験によるものである点を論じた。そのうえで、発表はさらに、この西欧の生活体験によって習得された南方の思考様式が、帰国後、東京（中央）に向かうのではなく、郷里の熊野を根拠地とする粘菌の研究という周縁／ミクロへと向かい、また自然科学と仏教的世界観を融合した「南方マンダラ」と呼ばれる独創的な学問構想へと向かったが、結果、彼の学問は欧米学界と日本の知識人のどちらにも完全には理解されないものとなってしまった。だが、その中で彼は現実的・戦略的に、みずからの学問・社会活動を実践していったのであり、ここに異文化間の交流と断絶のダイナミズムを読むことができる旨が論じられた。

報告3は、戦後、我が国において押し進められた「国際化」の問題を、在日朝鮮学校の問題という国際化の＜裏側＞の視点から問い直すというものであったが、発表は実地調査に基づく現状報告、分析、問題提起という形式で行なわれた。ともすればマクロ（国外である「世界」と日本の関係）からばかり論じられがちな我が国の「国際化」について、報告タイトルが示すように「足場」から、すなわち、日本社会の内部における異文化との関

係から「内なる国際化」を問おうとするものであり、そのために「在日」(朝鮮学校)に光が当てられた。ここで顕在化された問題は、在日朝鮮人に対して「もっと自由に生きれば良い」といった言説によって、みずからのエスニック(ナショナル)アイデンティティ(への拘泥)からの脱却を求めること、その意味での「国際化」を促す(強い)ことは、マイノリティを圧殺し、それ自体一つの暴力的ナショナリズムになりかねないという危険性であった。そのうえで報告者は、「在日」問題とはむしろ日本社会における多数者(マジョリティ)たる「日本人」の側の問題であるとして、他ならぬ「われわれ日本人」こそが「どうしようもなくマジョリティである」立場から絶えざる自問・内省を重ねることの重要性を指摘した。

第2部は、佐賀大学文化教育学部研究叢書Ⅱ『歴史と虚構のなかの<ヨーロッパ>—国際文化学のドラマツルギー』の合評会が行われた。コメントーターは、西九州大学・香川せつ子(イギリス近現代教育史・文化史)、本学・高橋良輔(国際政治学・国際協力研究)、本学・後藤正英(ドイツ倫理学・宗教学)、司会は、本学・相野毅によって行われた。研究領域がかなり異なるコメントーターたちであったが、実に周到な読みに支えられた予想できないコメントに、論文の執筆者および会場の参加者の質疑応答も熱気を帯びた。かなりの数の一般の参加者が質疑応答に加わった点は、国際文化という、えてして学問領域としては捉えどころのないものとみなされがちな名称が、実は、狭い専門領域の枠に縛られない点で、一般の方々にも開かれた領域となる可能性を示唆しているように思われた。紙面の都合上、それらのすべてを掲載することはできないが、「日本国際文化学会」全体への問題提起とも重なる著書の総括的質疑を、以下三点掲載する。

- 1: グローバリゼーションが語られはじめた当初は、国境が意味をもたなくなる世界の到来が楽観的に夢想され、このため、「国境の超え方」を中心テーマとしてきた。しかし、現在でも国境は依然として存在し、ある意味では、その存在を強化させている。その意味で、

現在求められているのは、国境を超えることの難しさ、及び国境を簡単に消滅させてはいけない理由についての議論ではないのか。

- 2: どの国でも外国への無関心は根強いものがある。無関心や無知は誤解や偏見をもたらす温床となる。サイドも主張するように、まずは相手を知ることからすべてが始まる。「国際文化学」は外国の文化を知る意義についてさらに粘り強く主張していかなければならないのではないのか。

- 3: 小規模・中規模の学会が乱立する状況を見ても明らかであるように、我が国の人文系の学会では、過去15年ほどの間に、専門分野の細分化が加速的に進行している。これは一見すると専門性を厳密に追究していることの現れともみえるが、現実には、きわめて限定された安全な範囲内ではしか発言しないことの小心さの現れともいえる。それぞれの専門学会内の事情を配慮するあまり、斬新な問題提起をせず思考停止に陥ることがあっては学問全体の不幸であろう。このような状況が存在する以上、学際的なネットワークを基盤とする国際文化学会は、相手の専門分野に対しては「素人として」率直に疑問を提起し、新たな刺激を得ることができる場として、存在すべきではないのか。

付記:

日本国際文化学会では、研究会に1万円を上限として補助金を出しております。今回は、昨年度開催のものから、佐賀大学で開催された研究会の成果を報告致します。

本年度、神奈川県茅ヶ崎市にある文教大学湘南キャンパスで七月に開催される第7回大会プログラムを特集したニューズレター第14号をお届けいたします。奮っての参加をお願いいたします。

国際文化学という新しい学問分野を掲げ、十数年が経過いたしました。この間、各大学に大学院が設立され、博士課程に進学し、博士学位を取得する人たちも育ってきています。次号は、これら学位取得論文についての特集を考えています。会員の皆様にはアンケートなど、情報提供をお願いするかも知れません。よろしくご協力ください。

(編集責任者: 神戸大学国際文化学研究科 木下資一)